献血してくれてありがとう。名前も知らない貴方へ

私は大学生のころから献血をしていました。私の血液型は AB 型で 10 人に１人の割合のもので，そのときはぼんやりと「誰かの役に立つなら･･･」と思いながら献血をしていましたが，自分が輸血を受ける立場になるとは思ってもいませんでした。

平成 10 年末の晴れた日の夕方，私はある産科診療所で出産をしましたが，出産時に弛緩出血が起こりました。弛緩出血というのは，出産後に子宮の収縮がうまくいかずに出血が止まらない状態になることです。

そのときの出血の状況は自分の足が生暖かく感じるほどの出血量であり，即座に医師たちが緊張して周辺があわただしくなるのを感じました。

大量出血のため急遽血液が必要となり輸血が開始されましたがそれでも出血が止まらず，輸血を継続しながら救急車で救急病院に搬送されることになりました。搬送中の救急車の中ですでに私の意識は薄れていました。

搬送先の病院で緊急手術をすることになりましたが，手術中も，縫合のために針を刺すとその部分からもどんどん出血する状態であり，その間も途切れず輸血をし続けていたそうです。緊急手術中，麻酔がかかっているにも関わらず私はなんとなく自分が手術を受けている状況を見下ろすような感覚がありました。その後意識は途切れ，気づくと手術が終って集中治療室のベッドで寝ている状態でした。

手術後はガーゼを 50 枚患部に重ねていても出血が止まらず，30 分も経たずにガーゼから血が染み出るような状態で，手術中からずっと途切れずに輸血されつづけていたことが術後のぼんやりした意識のなかでもわかりました。

結局，赤血球や血小板などの輸血を合わせて 5000 ミリリットル頂いたと後に聞きました。このような状況であり，医師も正直なところ助かる見込みは薄いと思っていたようで，手術後に「母になった女性は強いねぇ。」と言われたことを今でも思い出します。

5000 ミリリットルということは単純に少なく見積もっても 12 人以上の献血という名の善意を頂いたことになります。多くの方から頂いた血液によって手術は成功し，私は一命を取り留めました。

このような経過をたどったものの，手術の一週間後には子供に会うことも出来，３週間後には母子ともに無事退院となりました。

その時に生んだ子供も今年で 10 歳になります。子供に出産の時のことを聞かれますが，そのたびに「どうしてもあなたの顔を見たい，一緒に居たいってすごく思ったの。それでお母さん帰ってきたのよ」と子供に話しています。あの時の血液が無ければ，今私は生きていません。そのことは心の底から感じていることであり子供にも伝わっていることと思います。

あの時献血をしていただいた方へ，貴方の顔も名前も知りませんが貴方の献血のお陰で今も子供の顔を見て，抱きしめ，会話をし，何気ない日常の生活を送ることが出来ます。本当にありがとうございます。

直接お礼をいうことは出来ないけれども，貴方たちの善意は私の心と体の中で今も生きています。

普段の生活の中で直接人命救助をするような機会はめったに無いけれども，献血という行為をすることで，確実にだれかの人の命を救うことに繋がっています。

今日も，貴方が献血してくれた血液は，医療の現場でかけがえのない命のために使われています。

献血してくれて本当にありがとうございました。名前も知らない貴方へ。